

穎原退藏著作集

第六卷



潁原退藏著作集

第六卷

額原退藏著作集 第六卷

定価 二〇〇〇円

昭和五十四年九月一日印刷  
昭和五十四年九月十日発行

著 者 額 原 退 藏

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 田 博

発行所

中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七  
電話（五六―）五九二―一九

振替東京二二三四

©一九七九 検印廃止

目次

名句評釈 上卷

|      |     |       |     |      |     |       |     |
|------|-----|-------|-----|------|-----|-------|-----|
| 山崎宗鑑 | 7   | 荒木田守武 | 9   | 松永貞徳 | 11  | 野々口親重 | 14  |
| 松江重頼 | 15  | 安原貞室  | 16  | 北村季吟 | 19  | 西山宗因  | 20  |
| 井原西鶴 | 27  | 菅野谷高政 | 32  | 岡西惟中 | 33  | 田代松意  | 35  |
| 田中常矩 | 36  | 伊藤信徳  | 37  | 小西来山 | 38  | 池西言水  | 43  |
| 椎本才麿 | 48  | 上島鬼貫  | 50  | 山口素堂 | 56  | 松尾芭蕉  | 61  |
| 榎本其角 | 120 | 服部嵐雪  | 135 | 内藤丈草 | 141 | 向井去来  | 150 |
| 森川許六 | 157 | 各務支考  | 164 | 立花北枝 | 168 | 志田野坡  | 171 |
| 杉山杉風 | 174 | 越智越人  | 176 |      |     |       |     |

名句評釈 下卷

広瀬惟然 179

野沢凡兆 182

浪化 188

斎部路通 189

岩田涼菟 193

中川乙由 194

岸本調和 196

立羽不角 198

水間沾徳 199

松木淡々 201

建部綾足 203

横井也有 205

千代女 208

炭太祇 212

与謝蕪村 219

堀麦水 234

加藤暁台 237

三浦樗良 243

高桑闌更 248

加舎白雄 254

大島蓼太 259

黒柳召波 264

吉分大魯 268

高井几董 271

松岡青蘿 276

大伴大江丸 278

夏目成美 283

鈴木道彦 286

建部巢兆 288

井上士朗 290

小林一茶 294

松窓乙二 305

田川鳳朗 307

成田蒼虬 310

桜井梅室 312

古句評釈

俳句の鑑賞

古句の鑑賞

三四

名句評釈・古句評釈 初句索引

三五

後記

三六



俳諧評釈

一



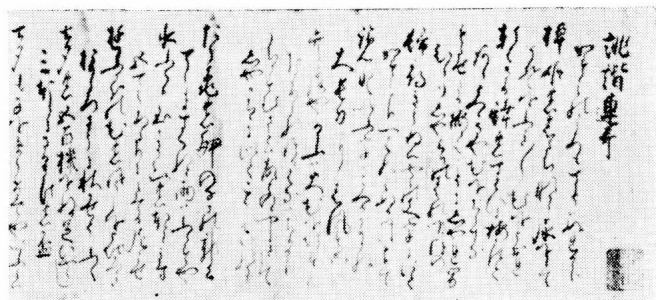
# 名句評釈 上巻

山崎宗鑑  
やまざき そうかん

本名志那弥三郎範重。近江の人、將軍足利義尚に仕へたが偶々その陣歿に遭うて出家し、摂津尼ヶ崎・山崎等に閑居した。又晩年讃岐観音寺に一夜庵を結び、とどまる事二十余年であつたといふ。天文二十二年歿、年八十九。その撰集になる『犬筑波集』(古くは只『俳諧連歌抄』と称し集めたもの。大永三年以後天文八)は、実に俳書の権輿とされて居る。

## 元朝の見るものにせん富士の山

句意は説くまでもなく明かである。誰にも分り易い句であるだけ有名になつて居るが、宗鑑時代の俳諧は滑稽を専らにしたものであるから、かういふ寧ろ真面目な句が果して宗鑑の作であるか実は疑はしい。又この句と共



宗鑑筆『犬筑波集』(東京 大橋  
図書館蔵)  
俳諧連寄

かすみのころもすそはぬれけり  
／棹姫の春たちながら尿をして  
／うそをふき／花をこそおれ  
／軒ばなる蜂のずはひに梅さき  
て／あらうつゝなや花をちらす  
な／もたせたる梅がえこそにし  
やれ男／びらりしやらりの春の  
明ばの／帰腸きうあんやうの文  
字ににて／かすみより一はねは  
ぬる月もりて／覧といふ字にか  
へるかりがね／大長刀に春風ぞ  
吹／弁慶やけふは火花をちらす  
らん／ながめられつるはなはち  
りけり／うちかすむさとは故ど  
のゝやしきにて／しやがちゝに  
似てこうもいれかし／だう龜の  
卵のなかの郭公／てしままくれ  
ど雨はふらずや／水ふぐり玉さ  
か山のほとゝぎす／五でうあた  
りにたてる尼こぜ／ゆふがはの  
花のほうしをうちかづき／おも  
しろさうに秋かぜぞふく／七夕  
の五百機をれる足びやうし／三  
ばしになるさけの盃／七夕も子  
をもりけてやいはふらん

に有名な守武の、

元朝や神代の事も思はるゝ

の如きも、当時の俳諧としては真面目すぎるのである。

一体これらの句が宗鑑や守武の作として人口に膾炙するやうになつたのは、『俳諧温故集』(運谷編。古今俳人の発句を延享五) などに採録されてからの事らしく、古い俳書には全く所見がないのである。しかしかゝる後世の句集を以て証とする事はもとより出来ない。従来古俳人の有名な句には、誤伝が少くないから注意せねばならぬ。但しこの句は宗鑑の作でないといふ反証もないので、今はかうした疑ひの多い事を注意しつつ、従来の説のまゝにあげておく。

まん丸に出づれど長き春日かな

出づれど〓一本には「出でて」とある。

春の日はいつもと変らず丸い形で出るけれども、一日の日は長いといふので、丸いのと長いとの矛盾に、をかしみを現はした句である。即ち全く智的興味に基く滑稽を主として居る。誠に幼稚な句だと考へられるだらう

が、当初俳諧の滑稽とは要するにかうした程度のものであつた。

手をついて歌申上ぐる蛙かはづかな

『古今集』の序文に「花になく鶯水にすむ蛙(中略)、いづれか歌をよまざりける」とあるに因んで、蛙が手をついて鳴く恰好を、歌を申上げるとをかくしく言つたのである。これも宗鑑の句として名高いものだが、『耳無草』(寛文頃の貞門の俳書。この句を宗鑑の作としたのは、元禄二年の『曝野』などが最初であらう。古集には所見がない)に道寸といふ人の句として出てゐるのでなほ疑はしい。

うづき来てねぶとに鳴くや時鳥ときと

うづき〓四月の異名卯月と、腫物の痛みうづくのとをか

ねぶと〓ねぶと(癩)と音太との言掛け。

四月が来て高声に時鳥が鳴くといふのを、癩の疼くのに言掛けたしやれである。

月に柄をさしたらばよき団扇かな

月に柄を〓摩訶止観「月隱ムネカズ重山ムナカミ今イマ、拳ケン扇セウ喩ユ之ノ。百

聯抄「月掛<sup>ニ</sup>青空<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>柄扇<sup>一</sup>、星排<sup>ニ</sup>碧落<sup>一</sup>絶<sup>レ</sup>櫻珠<sup>一</sup>。班婕妤、怨歌行「裁<sup>ニ</sup>成<sup>一</sup>合<sup>ニ</sup>歛<sup>一</sup>扇<sup>一</sup>、团<sup>ニ</sup>圓<sup>一</sup>似<sup>ニ</sup>明<sup>一</sup>月<sup>一</sup>」。夫木抄「夏の夜の光すゞしくすむ月を我が物がほにうちとはとぞ見る」

月を扇や团扇に喩へる事は、註にもあげたやうに古来詩歌に多く見るのであるが、これは更に柄をさしたらばと見立てた所に面白味がある。子供らしい無邪気な空想がこの句の生命である。

荒木田守武<sup>あらきだもりたけ</sup>

伊勢内宮の神官、荒木田七家の一なる蘭田家に生る。文明十九年十五歳の時神宮の禰宜に任ぜられ、天文十年一の禰宜に進み蘭田長官となつた。天文十八年歿、年七十七。天文九年、名高い独吟の千句を興行した。

飛梅やかろくしくも神の春

飛梅は道真の愛してゐた梅が、「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」といふ歌に感じて筑紫まで飛んだといふ。安楽寺庭中の梅がそれであると言伝へた。

神の春は老の春・宿の春・浦の春などと結んだ春はすべて新春の意である。「神の春」は神社の新春といふ程の意。

守武の『独吟千句』

(天文九年の作。慶安五年に刊行された。今伊勢宇治山田市の徴古館には守武白筆のものが藏せられて居る)

巻頭の発句である。彼は自ら神官の職にあり、又この千句は神意を伺つて催したものであるから、特に神の春を詠じたのである。かつ道真は古来文学の神として崇ばれたので、今俳諧の文運を祈る意も籠めて飛梅を

もつて来たものと思はれる。しかし句は軽々、飛んだ梅と神(紙)の言掛けとで縁をもたせた趣向で、全く言葉の技巧が句の中心となつて居る。これに附けた脇句は、

われもくゝの鳥うぐひす

といふので、神徳を慕つて飛んだのは梅ばかりではない、鳥や鶯までわれもくゝと飛んで行くといふのであらう。

落花枝に帰ると見れば胡蝶かな

「落花枝に帰らず」

(五燈会元、十三「落花難上枝、破鏡不重照」)

といふ諺を逆

用した機智が、一句のをかしみの中心となつて居る。勿論これは花下に舞ふ蝶の姿を、素直に観察したものではなく、一種の理智的な解釈をそこに挿んだわけであるが、当時の俳諧は即ちさうした所を多く狙つたのであるから、この句はその意味で成功した作と言へよう。而してこの句が古来汎く知られた所以も、その点に在る。

青柳の眉かく岸の額かな

青柳の眉ハナハナ和漢朗詠集、柳「昭君村柳翠ハナハナ於眉ハナハナ」(白樂天)。その他柳の縁を眉に喩へた事は多く、柳眉は美人

の眉の義となつてゐる。

岸の額ハナハナ岸の突出た端の所をいふ。枕草紙「あやふ草は岸のひたひに生ふらんも」

眉と額との縁語で仕立てた句。これまた岸頭になよやかに垂れた柳の糸を、美しい景色として描き出したのではなく、専ら言葉の縁に興味をつないだのである。

せこの者来べき宵なり泊り狩が

せこハナハナ勢子、列卒。狩場などで鳥獸を狩り立てる者。かりこともいふ。

せこの者来べき古今集「わがせこが来べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」(衣通姫)

泊り狩ハナハナ泊り山のこと。連歌俳諧で春季とする。華実年浪草「泊り山とは山野に出て宵に雉子の鳴く所を聞置きて、未明に行きて鷹に雉子を捕らするを泊山とも、鳴鳥(ナイト)狩とも聞きする鳥とも朝鷹ともいふ」

明朝鷹狩をするので、今夜は勢子の者どもが来べき筈だといふのが、表面の意である。しかしそれだけの事ならば、極めて平凡で、何の面白味もない。それを衣通姫が天皇の御出でを待つて詠まれたといふ『古今集』の歌

の句にもちつたのが興味ある点である。しかも下に「泊り狩」とおいてそのもちりの意を生かした所に一層働きがあるのである。

夏の夜は明くれどあかぬ臉かな

短夜はすぐ明けても、寝足らぬ臉はなかなか開かない。あける、あかぬの掛合ひを興味の中心とした句。

まつながていとく  
松永貞徳

京都の人、幼名勝熊。長頭丸・逍遊軒・明心居士等の別号がある。父永種は摂津高槻の刺史入江九郎盛重の男五郎政重の長子であるが、後、姓を松永と改めた。この父が連歌師宗養の門人であつた為に、貞徳もその感化をうけ、少時から連歌を里村紹巴に学んだ。又、和歌を九条植通・細川幽斎等について学び、後、俳諧一道の祖となつた。承応二年歿、年八十三。『淀川』『油糟』（二書で一名『新增大筑波集』といふ。『大筑波集』によつて附方の実例等を示したもの。寛永二十年刊）『御衆』（俳諧合去嫌の法式を説いたもの。寛永二十年刊）等の撰著がある。慶安四年、万治二年刊。

鳳凰も出でよのどけきとりの年

中国では聖代には麒麟や鳳凰が出るといふ。丁度今年は酉の年で、しかも御代泰平である。鳳凰も出てよいぢやないかといふのである。酉の年だから鳳凰をもち出したのが趣向である。貞門の新年の句には、干支によつて此の種の趣向をこらしたものが頗る多い。例へば、

四国より来る春なれや申の年

申の年Ⅱ四国猿に因む。

霞さへまだらに立つや寅の年  
みづのとの酉の先づ酌むことし哉

みづのと酉Ⅱ「酒」の字に因む。

の如き類である。

花よりも団子やありて帰る雁

雁は春になると花を見捨てて北へ帰つて行く。それで昔の歌人も「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」(伊勢の歌、『古今集』に出づ)とよんだ。この『古今集』の歌を俗に砕いたやうな趣向である。諺に「花より団子」といふが花を見すてて行く雁は、多分向うに花にまさる団子があるからだらうといふ意。なほ、この諺を用ひた古俳諧を二、三抄出して見よう。

花よりも団子とたれか岩つゝじ (大筑波集)

花よりも団子で見たや二十日草 時之

団子よりまさるといふや萩の花 道保

団子より花といふべし二十日草 実継

貞門の句にはこのやうに俚諺をとつて一句の趣向を立

(以上、鷹筑波集)

てたものが頗る多い。だから貞門俳諧の作法書中には『毛吹草』(野々口立圃撰、正保二年刊)・『世話尽』(曾虛撰、明暦二年刊)等、諺を多く集めたものさへある。随つて研究の立場はちがふが、俚諺研究者はぜひ貞門の俳書は一読せねばならぬ。それほど貞門の句と俚諺との交渉は深いのである。

しをるゝは何か杏子の花の色

何か案ずると杏子と言ひかけたまでの句。しかもそこが此の句の最も主要な滑稽であることを忘れてはならない。この言掛けと縁語とは、いふまでもなく当時の俳諧には最も喜ばれた趣向で、貞門の俳諧を解するには、いやでもその点を主とせねばならない。しかしその間自ら萎れた杏子の花が擬人化された趣があつて、物案じげな女のさまなどが連想される。

ねぶらせて養ひたてよ花の雨

この句には「子をまうけたる人に」といふ詞書がある。

子供の誕生を祝つてやつた句である。花の雨を飴にいひかけて、そこでねぶるといふ縁語をもつて来たのが一

句の手柄。句意は雨が花を養ひ立てる如く、飴を舐らせ  
てその子を養ひ立てよといふのである。

# 七夕のなかうどなれや宵の月

「仲人は宵の口」といふ諺（この諺は媒酌人は意々三々九度の盃却つて邪魔にされるものだから宵の口で開いたがよいといふ意）を用ひた趣向。一句の意は七夕は牽牛・織女の二星が、年に一度の逢瀬を楽しむ夜だから、七日の月は宵のうちですぐ引込むといふのである。今は中学生でもそれだけの解釈をきくと、「何だつまらない。妙にこじつけたものだ」と一笑に附することであらう。しかし貞徳の当時では、この句などこそ妙作として喜ばれたにちがひない。貞門の句をよむものはその喜ばれた点をやはり十分理解しておかねばならない。

## 皆人の昼寝の種や秋の月

昼寝の種は原因となるものの意。

秋の夜は月見のために、終夜皆人々が起きて居るので、昼は昼寝をしなければ睡眠不足を補へない。結局秋の月は皆の人の昼寝の種だといふのである。これも幼稚な理

窟をひねつた滑稽に過ぎないが、少くとも、言語の技巧のみに終つてゐない点は、いくらか文学としての取柄は多からう。しかもかうした一句全体の意味から齎される滑稽、——それも此の程度の幼稚さでさへ、実は貞門の句には甚だ少いのである。

## 冬籠り虫けらまでも穴かしこ

あなかしこは恐惶謹言といふのと同じく、書簡の終りを結ぶ時など用ひる語。それを虫類が冬になつて地上から去る暇乞の語と見なしたのである。

虫けらまでも冬になると暇乞して穴に籠るといふのである。それを例によつて「穴かしこ」と言掛けたのが一句の眼目となつてゐる。

野々口親重のぐちかしげ

京都の人、雑屋を業とした。若くして連歌を兼与に、和歌を光広卿に、俳諧を貞徳に学んだ。後、重頼と確執を生じて貞徳の門を去り一派を成した。法体して立圃と号す。寛文九年歿、年七十五。『発句帳』『はなび草』『小町躍』『六日の菖蒲』等を初め、撰者が甚だ多い。その句集を『空磔』(立圃自撰。自作の発句三)といふ。(百余を集む。慶安二年刊)

源氏ならで上下に祝ふ若菜哉

『源氏物語』の中で若菜の巻だけは上下二巻に分れてゐる。それで正月に貴賤上下とも若菜を祝ふのを、これに引きかけた作意で、貞門常套の手段といふべきである。

天も花に酔へるか雲の乱れ足

天も花にハナにハナ和漢朗詠集、花時天似醉序「天酔ツ于花ハナ」李之盛也(管丞相)

『朗詠集』の句を用ひて、雲の乱れを花に酔つた千鳥足かとしやれたのである。

綻ほころぶや尻も結ばぬ糸桜

尻も結ばぬ糸ハナ後始末をせぬ事の喩へ。

「尻も結ばぬ糸」といふ諺によつた句。縫つた糸の尻を結ばねばやがて綻びるといふのを、糸桜が咲き初める意にかけ、更に糸を糸桜にいひかけたので、全く言掛けと縁語だけで作り上げた句である。

あらはれて見えよ芭蕉の雪女

芭蕉の雪女ハナ謡曲芭蕉「さては雪の中の芭蕉の偽れる姿と聞えしは、疑ひもなき芭蕉の女と現はれけるこそ不思議なれ」。雪中の芭蕉とは王摩詰が描いたといふ故事で、炎天の梅花と同じく元来有るべからざる事だから、謡曲の本文では偽りの序詞に用ひてある。

芭蕉の精が女となつて現はれる。しかもそれが珍しい雪中の芭蕉といふのならば、その女は雪女と現はれて見えよといふのである。謡曲の文によつて、謡曲にない雪女を出して来たのが俳諧である。